

台湾巡検余滴

山本 茂

旧年12月8日から15日まで、埼玉大学地理学教室の教官・院生・学生26名で、台湾巡検に出かけた。もちろんお茶大の講義は休ませていただいた。出発日は、奇しくも真珠湾攻撃50周年というか、太平洋戦争開始の日。攻撃開始の暗号名となった「ニイタカヤマノボレ」は、ほかならぬ台湾の最高峰「玉山」(3,952m)であった。

巡検は、台湾師範大学地理学系の全面的なバックアップを得て、きわめて充実した内容のものとなり、大成功のうちに無事終了することができた。

参加した学生諸君も、事前準備から実地調査、報告書作成に至るまで、いろいろな学習機会に主体的に参加して、多くのものを学びとることができた。現在の学生気質を無気力とか受け身とか言う前に、教師の側にもやるべき多くのことがあるというのが、私たちの教訓でもあった。

埼玉大学では、他大学の多くの地理学教室と同様に、地理を学ぶ学生は地理学野外実習を2単位の集中講義として履修することになっている。例年は3人の教官が別々に実施しているが、今年度は合同で海外にでかけてこれを行うという点が新しい試みである。

当初、この計画を事務部に打診して見たが、とてもすんなり行きそうになかった。何が問題かというと、①正規の講義である野外実習を国内でなく海外で実施するという点、②国交のない「国家」を訪問して、国立大学の教育という業務(大袈裟に言えば国の仕事)を行うということ、③教官に公務出張を命ずる予算の裏付けがないこと、④海外旅行中の事故等の危険、⑤こうした不安要素を伴う巡検に対して、できるだけ関与をさけ責任を回避したい気持ち等であるらしい。事務担当者の気持ちも個人的には分からないではないが、それにしても、この国際化とか情報化とかいう錦

の御旗がまかり通っている御時世に、国立大学には海外巡検を実施する制度がまるで整備されていないのである。それどころか、まるで悪いことをもくろんでいるように、とんでもない教官がいるとさえ言われる。じっさい地理学のようなフィールド科学における巡検の意味すら理解できない意識の担当者もいないではない。

ヨーロッパ諸国では、国境線の感覚が私たち日本人とは大きく異なるから、多くの地理学教室では、夏ともなるといとも簡単に自動車でキャラバンを組んで北へ南へと出掛けている。これは学生・院生のための正規の巡検であったり、研究者の実地調査であったりするが、そのために何枚もの申請の書類を書いたり、あちこちのセクションと交渉したり、ましてや教授会で承認したりということは、仄聞するかぎりではないようである。要するに巡検の文化が確立しているのである。

私たちはこうした問題点を一つひとつ解きほぐしたり緩和したり、また他大学の実施例を調査して、いろいろな手立てを考えだした。このノウハウの蓄積は、貴重な経験だった。

日台蜜月時代に留学された俊英が、いまでは台湾師範大学地理学系の中心メンバーとなっており、私たちの試みは幸運にも、そうした先生方の全面的な御援助を得てはじめて実行できた。私たちは、師大地理研究所(大学院)との合同巡検の形で、「東西横貫公路」以北の地域を3泊4日の行程で巡検し、自然・人文にわたって地理的に興味深い事項を詳細に説明していただいた。

台湾巡検の詳細は、『地理学野外実習91報告～台湾～』(研究編)(観察編)[全294頁、埼玉大学教育学部地理学教室編、1992年3月発行]に記録されているので、ご参照いただきたい。